毎日新聞寄附講座　07　ジャーナリズムの現在Ⅱ
テーマ　「生活・くらしニュースとジャーナリズム」

第1回　くらしと新聞～毎日「くらしナビ」面の狙い

2007年10月2日
毎日新聞生活報道センター長・城島徹

「生活報道センター」とは
①生活家庭部②夕刊編集部③くらし局遊軍――で構成。政治部／経済部／社会部／科学環境部／学芸部／運動部／地方部／写真部／外信部などと同様の東京本社編集局にあるセクションの一つ。
①生活家庭部・・・衣食住など「くらし全般」を担当。部長はじめ部員の半数以上が女性。産休中の女性、育児休暇を最近取った男性もいる。
②夕刊編集部・・・週刊誌的な感覚でインタビュー特集などを担当。インタビューの名手や専門性のある書き手がいる。
③くらし局遊軍・・・社会保障（年金や介護問題など）を他部と連携して取材。政治部や社会部に在籍した経験豊かなスタッフ。

「くらしナビ」面
　4月に刷新した生活面の総称。コンセプトは「暮らし目線の役立つ生活関連記事、情報」。考えたコピー案は「本当に知りたいことは、ここにある」「『暮らし』からしか見えないものがある」「社会の基本は暮らしです」。

　デザインを雑誌感覚のスタイルに一新し、生活情報や読み物、人気コラムなど、暮らしに役立つ話題を掲載。しかも読みやすく、わかりやすい書き方に徹する。現在は連日3ページ。Q&A方式の記事を大胆に掲載し、双方向性を強く打ち出している。

　週1回は社会保障制度を解説するページ「明日の私」として、医療、年金、介護などの仕組みを生活者の視点で紹介している。

　昨年から編集局で紙面改革に向けて議論を重ねてきた。「2007年は団塊世代が続々と60歳定年を迎える」「中高年はじめ生活者の感覚に寄り添い、読者の『どうしたらいいの？』に答えよう」「コンセプトは役に立つ紙面」……。

　その結果、テーマ別の面を曜日ごとに設定した。「装う」「働く」「医療」「食べる」「安心・安全」「住まい」「健康」「デジタル」「脳を鍛えたい」「楽しむ」「マネー」「グッズ」「子ども」「旅」「福祉」「ペット」「ガーデニング」「消費」「リフレッシュ」など。

キャンペーン的な連載

キャンペーン的な連載記事「クルマ高齢社会」を4月の紙面改革に合わせてスタート。「妻をひいてしまった」――。不慣れなオートマチック車（AT車）を運転した79歳の夫の悲劇だ。「この教訓を生かさねば」。そう考えた私たちは「シルバー向け講習活用」を呼びかける記事を添えた。連載は「認知症で逆走」「交通刑務所の高齢受刑者」など、深刻な問題を現場で取材し、認知症検査の受け方など、役立つ情報も合わせて提供している。

取材態勢の工夫

生活報道センターはじめ経済部、社会部、学芸部、科学環境部、地方部など他の部のデスクや大阪、九州のデスク、記者との円滑なコミュニケーションを図る。毎週開かれる部長会やデスク会でスケジュールなど事前に情報交換している。

他の部との連携を促すため、内閣府、経済産業省、厚生労働省、国土交通省、総務省、財務省、文部科学省、農林水産省、日銀クラブの10クラブに生活報道センターの局遊軍記者ら7人が新たに加盟した。

評価

「くらしナビ」への反響の手紙やメールはスタート当初の4、5月で推計500件。「クルマ高齢社会」には200件近くあり、高齢者本人や家族から切実な声が届く。長期連載を構え、制度改革や行政の交通サービスの改善、メーカーの対応につなげたい。

社会保障の「どこで死にますか（療養病床削減）」にも100件近い反響が寄せられた。こうした中から、ナビ（Q＆A）に使える質問も多数あり、双方向に弾みがついた。読者の反響から年金支給漏れの具体ケースを紹介した。

簡潔なQ＆Aの「ナビ」スタイルの原稿は、斬新なデザインとあいまって新しい記事スタイルが読者に受け入れられているように感じる。

投書やメールの具体例

「社会保険庁の問題も、拉致の問題とか、憲法とか選挙の問題までも、くらしナビの中で扱うと、全然視点が違って、それはそれで面白いんだろうなぁと思います。一面トップで扱うより、案外、ちゃんとふつ～の人の代弁をしてもらえるかも」（メールで40代女性）

「初めてお便りをさせていただきます。『Dr中川のがんを知る』を興味深く拝読しております。二人の愚息に『お父さん、癌ってなんなの？』と聞かれています。当記事をもとに、わかりやすく子供たちに伝えているこの頃です（少しは家族の尊敬を勝ち取っているようです……）」（メールで男性）